

## 自律的な学びを支援する教育改善プログラムの開発と展開

高度学校教育実践専攻  
教職実践力高度化コース  
前 田 直 彦

実習責任教員 久 我 直 人  
実習指導教員 藤 井 伊 佐 子

### I. 課題分析

#### 1. 課題設定の理由

##### (1) 置籍校の概要（平成 28 年度）

置籍校は生徒数 615 名、教員数 46 名の全日制普通科高校である。本校には、主に上級学校への進学を希望する生徒が入学してくる。例年進学率は 90% を超えており、大半の生徒は 4 年制大学をはじめとする上級学校へ進学していく。希望する進路に効果的に対応するために 2 年次から文系・理系に分かれて学ぶことになる。進路状況は、平成 28 年 3 月卒業生のうち、進学者は 181 名、就職者は 11 名、その他 7 名となっている。

##### (2) 置籍校の課題把握

##### 1) 置籍校の課題のまとめ

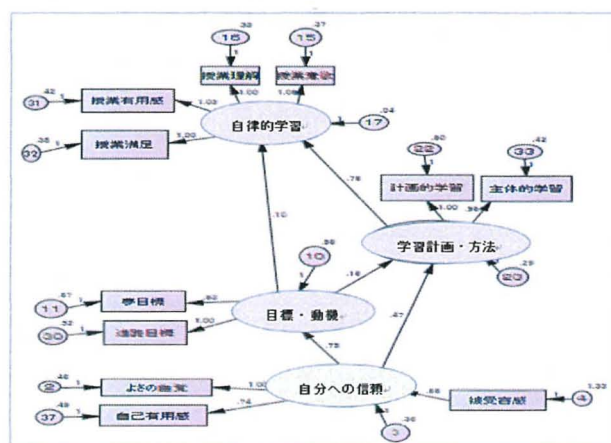
平成 27 年 12 月に実施したアンケート（生徒、教職員）結果のデータを中心に、置籍校の課題を整理した（表 1）。その結果、生徒の課題と教職員の課題は表裏一体であることが捉えられた。

表 1 置籍校の課題の整理

生徒が抱える教育課題	自分への信頼（期待）の醸成 将来への目的意識醸成 学習サイクルの未確立 受身の学習 学習方法の獲得
教職員の教育活動に関する課題	教え込み型の授業 系統性が十分でないキャリア教育
教職員の組織上の課題	個業性

#### 2) 生徒の意識と行動の構造に適合した置籍校の課題の整理

共分散構造分析（IBM SPSS Amos Ver.19 使用）を行った結果、「自分への信頼」「目標・動機」「学習計画・方法」「自律的学習」の構造的因果関係が一定程度明らかとなった（図 1）。



(モデル適合度 CFI:0.972 RMSEA:0.066)

図 1 置籍校生徒の意識と行動の構造

#### (3) 実践研究の目的

学びの基層をなす第 1 学年を対象とし、自律的な学びを支援する教育改善プログラムを開発し、導入・展開することを通して、自律的な学びに向けた生徒の変容を促しその効果を検証することを本実践研究の目的とした。

#### (4) 実践研究の目的達成のための課題

- ① 置籍校の教育課題の可視化
- ② 教育改善を実現する教育改善プログラムの構築
- ③ 構築したプログラムの展開による組織化と教育改善に向けた実践
- ④ プログラムの効果性の検証

## 2. 実践研究の枠組み

### (1) 置籍校の教育課題解決に適合した教育改善プログラムの策定

置籍校の生徒が抱える教育課題についての構造的な理解を踏まえて、具体的な改善策の策定を行った。可視化された課題に応える知見として、自己調整学習の知見を援用した(図2)。

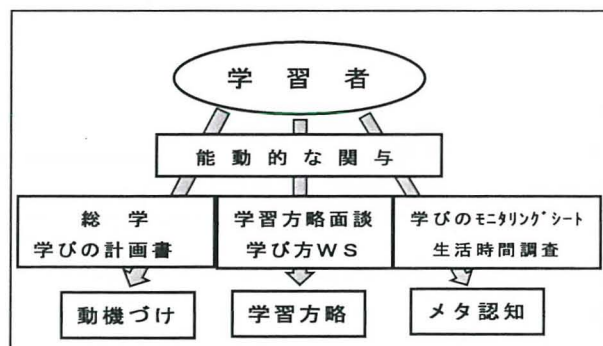


図2 自律的な学び支援の教育改善プログラム

### (2) 実践研究の具体的な取組および実践研究の基本的枠組み(展開イメージ)

置籍校の課題解決に向けた具体的な方策に対応した取組を設定し、「教師の主体的統合モデル」(久我 2011)の組織マネジメントの考え方に基いて、実践研究を展開した(図3)。

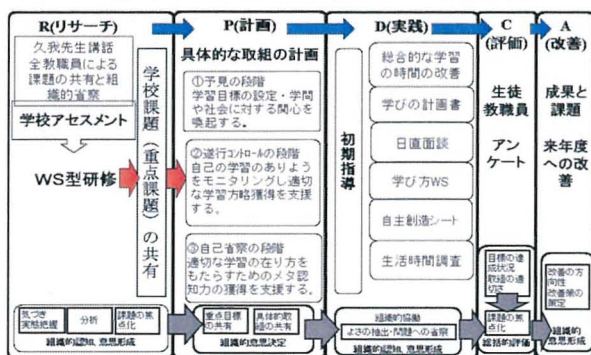


図3 実践研究の基本的枠組み

## II. 課題解決

### 1. 実践研究の実施

#### (1) Research 期

置籍校の実態を把握するために、学校アセスメントを実施した。その後、平成28年2月15日に、本学久我教授に「効果のある学級・学校

づくりの理論と実践」と題してご講演いただいた。さらに、アンケート(生徒、教職員)の結果を共有し、組織的省察(ワークショップ型研修)を行い、生徒の学びと生活におけるよさと課題の抽出、効果のある指導を共有した。ブレインストーミングにより日ごろ感じていることを出し合うことで、満足度の高い研修となった。後日、意見を整理し、課題が共有された。

#### (2) Plan 期

学校アセスメントおよび組織的省察で捉えられた生徒の課題を改善するために、具体的な取り組みが決定した。

- ① 目的意識醸成・動機づけプロジェクト  
学習目標の設定と学問や社会に対する関心の喚起を目指す取り組み「総学」「学びの計画書」
- ② 学習方略プロジェクト  
自己の学習のありようをモニタリングし適切な学習方法獲得を目指す取り組み「学習方略面談」「学び方ワークショップ」
- ③ メタ認知力向上プロジェクト  
適切な学習の在り方をもたらすためのメタ認知力向上を目指す取り組み「学びのモニタリングシート」「生活時間調査」

#### (3) Do 期

##### 1) 目的意識醸成・動機づけの取り組み

##### ① 「学びの計画書」の作成

自分のよさや課題を見出し、その上で目標を設定し、目標達成のための計画を立てて実行する。これら一連の要素を盛り込み、「学びの計画書」を導入した。自己と向き合い、自己認識を深めるために、定期的に記入時間を設定した。

図3 「学びの計画書」記入例



## ②総合的な学習の時間の取り組み

### 「共通講座」

共通講座では、各分野の今日的課題や高校での学びとの関連を広く捉えるために、1学年団の教員がそれぞれの得意分野、関心のある分野について学年全体に講義した。原則として毎回2名ずつの担当で実施した。また、一方的な学びにならないように、理解を深め、能動的な学びにつなげるためのワークショップも実施した。



図4 共通講座の様子



図5 共通講座WSの様子

### 「大学体験講座」

共通講座の後、生徒全員が県内4大学のいずれかで大学体験講座を受講した。共通講座で広げた各分野への理解をさらに深め、地域社会の問題やその基盤となる学問分野への興味・関心を喚起することを想定した。また、体験講座の後、夏休みから2学期初頭にかけて学校祭でのポスターセッションの準備を行った。学校祭では、ブースを設け、ポスターセッションを行った。保護者等の来場者に学んできたことや模造紙の内容等を説明した。



図6 大学体験講座の様子



図7 ポスターセッションの様子

## 2) 学習方略獲得に関する取り組み

### ①学習方略面談

生徒の学習方略獲得のために、学習方略面談を実施した。放課後の10分程度を使い、その日

直に当たった生徒を対象に実施した。「学びの計画書」や後述する「学びのモニタリングシート」等を用いて実施した。

### ②学び方ワークショップ

学習方略獲得に向けて、学び方ワークショップを行った。個々の生徒がこれまでの学習経験により得た学習スキルやアイデアを共有することで、より効果的な学習方法を協働的に模索し、互いの学力を向上させることを目指した。また、その過程を通して、他人の意見を尊重する態度と協調性を養うことも目的として実施した。



図8 学び方WSの様子



図9 学び方WSの様子

## 3) メタ認知力向上に関する取り組み

### ①「学びのモニタリングシートの作成」

「学びのモニタリングシート」は効果的な学習方略の遂行や目標の進捗度合いに照らし合わせ自己の学習をモニタリングし、メタ認知につなげようとするものである。原則として、毎朝のSHRの時間に記入した。

月/日	1月(月)	1月(火)	1月(水)	1月(木)	1月(金)	1月(土)	1月(日)	今週の目標
学								学習量
習								進捗度
シ								目標の達成度
ー								いずれかに1つをつける
ト								1
								2
								3
								4
								5
								6
								7
								8
								9
								10
								11
								12
								13
								14
								15
								16
								17
								18
								19
								20
								21
								22
								23
								24
								25
								26
								27
								28
								29
								30
								31
								32
								33
								34
								35
								36
								37
								38
								39
								40
								41
								42
								43
								44
								45
								46
								47
								48
								49
								50
								51
								52
								53
								54
								55
								56
								57
								58
								59
								60
								61
								62
								63
								64
								65
								66
								67
								68
								69
								70
								71
								72
								73
								74
								75
								76
								77
								78
								79
								80
								81
								82
								83
								84
								85
								86
								87
								88
								89
								90
								91
								92
								93
								94
								95
								96
								97
								98
								99
								100

図10 学びのモニタリングシート例

### ②生活時間調査

生活時間調査は、家庭での生活時間を調査し担任をはじめとする教員が生徒理解を深め、学習方略面談等に活用することを想定して年に3回実施した。

## 2. 実践研究の総括

### (1) 生徒の変容

アンケート結果から目的意識醸成，学習方略，学習習慣，自己の学習に関するメタ認知の各項目で数値の高まりが確認された（図 11）。

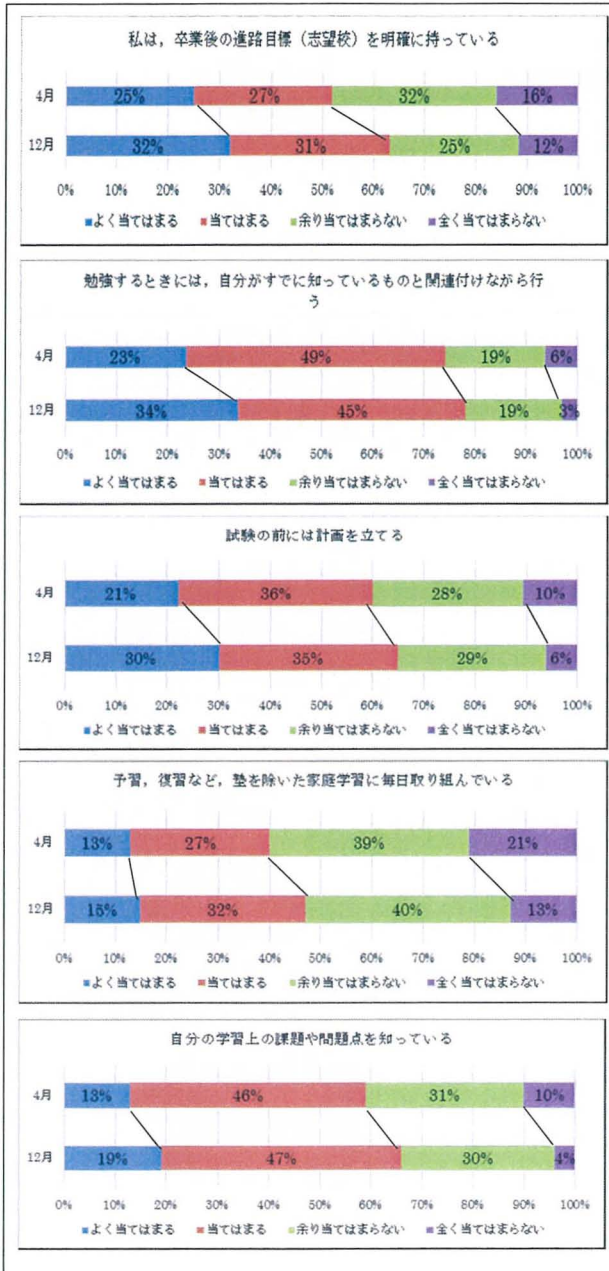


図 11 生徒アンケート結果

### (2) 教職員の变容

アンケート結果から，指導の質的変容（「授業の工夫」）及び意識の変容（価値づけ，勇気づけ）が確認された（図 12）。これらの変容が

組織の力（協働性）となり，前述した生徒の変容を生み出したと推察される。

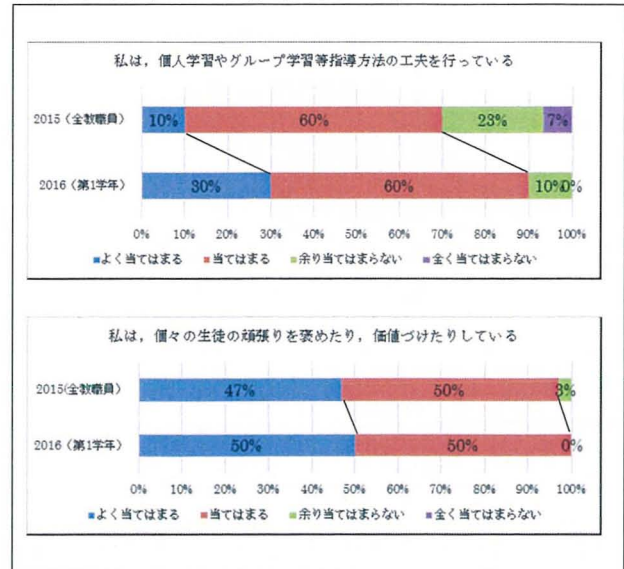


図 12 教職員アンケート結果

### (3) 本実践研究の成果と課題

本実践研究の成果として，次の 4 点があげられる。①本実践研究で重点課題の一つとしていた目的意識の醸成が確認できたこと。②学習方略の獲得やメタ認知力の向上が確認できたこと。③学習習慣の確立が促されたこと。④教師の指導の質的変容と意識の変容が見られたこと。以上，4 つの成果から，「生徒の教育課題に焦点を当て，生徒の意識と行動の構造に適合した自律的な学びを支援する教育改善プログラムを開発し生徒の変容を図る」という本実践研究の目的は，一定程度達成されたと捉えられる。

### (4) 今後の課題と展開の可能性

本実践研究では，生徒の意識と行動の構造を明らかにし，学習遂行上の諸課題の改善に向けて効果のある指導を組織的に展開してきた。それにより，目的意識の醸成や学習方略の獲得，メタ認知力の向上等が一定程度図られたことは一つの可能性を示すものとして捉えている。

実践のさらなる継続を通して，本プログラムをより精緻化していくことが，今後の課題であり展開の可能性であると考えられる。